

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009.6.13～14（徳島大学）
 スペシャルセッション（SS）討議内容の記録

| | |
|--|--|
| セッション名：自転車道の目標像と整備戦略 | |
| 日付： 6 月 14 日（日）曜日，セッション時間： 16:00～17:00 | |
| オーガナイザー名（所属）： 金利昭（茨城大学） | |
| 討議内容 | <p>自転車に関わる研究に関しては、土木計画学研究委員会自転車空間研究小委員会（代表：徳島大学教授 山中英生）のメンバーを中心に精力的に研究が進められている。そこで、現段階までの自転車研究を踏まえて、小委員会メンバー5人の現実的な自転車空間整備戦略に関する主張・提案・見直しを通して、自転車空間整備の目標像を議論した。</p> <p>1. 吉田長裕（大阪市立大学）は、通行方法と道路構造・交差点処理に関する分析結果を俯瞰して自転車道と自転車レーンの位置づけに関して、対面通行自転車道は利便性安全性に問題があることから、自転車レーンには速度の速い自転車を位置づけ、自歩道には遅い自転車を位置づけることが現実的な選択肢としてあることを主張した。自転車レーン活用に関しては、下記にあるように山中教授、屋井教授も主張しているところであり、これに関してフロアーの賛否を問うたところ、レーンの積極活用に関して多数の賛同が得られた。</p> <p>2. 元田良孝（岩手県立大学）は、ルールと普及戦略に関して、歩道から車道・自転車道・自転車レーンへの誘導、自転車道・レーン空白区間でのルールづくり、法令順守への働きかけの三点に関して具体的戦略を持って主張した。特に、「自転車愛の一声運動」を強調した。討議の中で、ルールと普及に関して、自転車問題の中だけで捉えるのか、ルール一般の中で捉えるのかという問題提起がなされた。さらに、この種の問題は、行政の委員会の中でもいつも議論だけはなされているが、このような具体的な対応が必要であることが指摘された。</p> <p>3. 山中英生（徳島大学）は、ガイドライン作成に携わっている立場からネットワーク形成の候補路線と構造選択に関して俯瞰的に整理を示し、できるだけからの検討ではなく需要として望ましい姿からの検討が重要であるとし、構造選択基準として自歩道選択は厳しくレーンは創る方向が望ましいとの見解を示したが、自転車走行は安全とは異なる安心感の取り扱いが課題であるとした。</p> <p>4. 久保田尚（埼玉大学）は、自転車ネットワークとバリアフリーネットワーク・まちづくりに関して、バリアフリーネットワークとの整合とまちづくりとの整合を考えていくことが重要であることを強調した。当然といえば当然のことであるにもかかわらず、このような観点からの議論が少ないこと、今ここであえて強調されなければならないという現状の欠落点が浮かび上がった。</p> <p>5. 屋井鉄雄（東工大）は自転車政策と計画制度に関して、理念の確立・浸透・徹底、政策の継続性、原則歩行者と分離（自分はレーン派）、対面通行自転車道の問題、計画を制度化すること、サービス水準等を主張した。</p> <p>6. 残りの時間でフロアーとの意見交換を行った。対面通行自転車道に対して一方通行自転車道の可能性が議論された。また、自転車政策推進を正当化する根拠として、安全に加えて環境、さらに健康がキーワードであることが主張された。最後に長年自転車政策に関わってきた高田教授（日本大学）からは、管理瑕疵責任から考えることが重要であるとの助言を賜った。管理瑕疵の問題は、元田教授が指摘したルールの問題と山中教授が指摘した安全（交通事故）と安心（感）が異なる問題とも関連し、自転車交通文化に繋がる重要な問題と認識した。</p> |

